

1 学校教育目標

- 1 礼儀を重んじ、他を思いやる生徒（徳）
- 2 自ら考え創造する生徒（知）
- 3 心身を鍛え、根気強く成しとげる生徒（体）

2 めざす学校像、児童・生徒像、教師像

○学校像	義務教育である小中学校で一番に身に付けさせなければならないことは『生きる力』の育成である。大海原を自らの足で歩む力である。そのために必要な体験の場を、意図的・計画的に提供し、望ましい集団活動を通して自己及び集団の向上を図る意識を育む。また、そのために必要な基礎的・基本的な知識・技能をしっかりと身に付けさせる学校を目指す。
○児童・生徒像	<ul style="list-style-type: none"> ○ 病気に負けない、心身ともに健やかな体をもつ生徒。 ○ 『生きる力』に欠かせない「基礎的な知識」の習得に意欲的に取り組む生徒。 ○ 身に付けた知識を実生活で生かせるような行動を自ら行い、意欲的に経験を積み上げていく生徒。
○教師像	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教育公務員としての使命と責任を自覚し、生徒・保護者・地域の信頼に応える教師。 ○ 余念なく指導力の向上に努め、生徒理解に優れ、自らの生き方をもって生徒を導くことのできる豊かな人間性をもった教師。 ○ 主体的かつ的確な判断ができ、組織として迅速に動くことのできる教師。 ○ 「危機管理さしすせそ」を常に意識できる教師。

3 学校の現状及び前年度の成果と課題

1 学力向上

授業力向上につきる。若手教員が大幅に増えていることから、若手教員の授業力向上が急務である。幸い、国語・数学・英語については、教科指導専門員の指導により授業力の向上を図る指導を得られ、効果が確認された。教科指導力向上の基礎となる学級経営力の向上が課題である。

2 不登校・不適応対応

不登校出現率が2%台前半で推移していることは成果である。特に今年度は、SSWとの連携により、様々な課題に対応できたことは良かった。民生児童委員と連携した保護者支援も軌道に乗ってきた。次年度は特別支援教室が開設されるため、円滑にスタートさせたい。

3 生徒指導の充実

個別に支援の必要な生徒が増え、一斉指導が困難な場面が散見される。その場の現象にとらわれた指導を行うことなく、個々の生徒の困り感を理解した指導を展開していく必要がある。そのためにも、一人一人の教員がインクルーシブ教育を理解し、より個に応じた指導を展開できるスキルを身に付けていくことが求められる。体罰事案は発生しなかった。

4 重点的な取組事項

	内 容	実施期間（年度） H:平成 R:令和				
		H30	R1	R2	R3	R4
1	学力向上アクションプラン	○	○	○	○	○
2	不登校・不適応対応	○	○	○	○	○
3	学級活動の充実	○	○	○		
4						

5 令和元年度の重点目標

重点的な取組事項－1		学力向上アクションプラン							
A 今年度の成果目標		達成基準 (目標通過率)		実施結果 (通過率結果)		コメント・課題		達成度 ◎○△●	
各種学力調査の結果向上と家庭学習の定着		平成31年4月の目標通過率 58%年度末到達目標63%		4月通過率 50%		年度末通過率 38.3%		△	
B 目標実現に向けた取組み									
新・継	アクションプラン	対象教科 実施教科	頻度・ 実施時期	具体的な取り組み内容 (誰が、何を、どのように)	達成確認 方法	達成目標 (=数値) (いつ・何を・どの程度)	実施結果	コメント・課題	達成度 ◎○△●
1 新規	家庭学習ノート	任意の教科	毎日	<p>【指導体制】全学年全学級で実施。中学1年の4月から中学3年の12月までを取組期間とし、中学3年の1月以降の提出は任意とする。月間パーフェクト賞の生徒は紙面で表彰し、年間パーフェクト賞の生徒は全校生徒の前で表彰する。</p> <p>【取り組みのねらい・目的】学習習慣を身に付け、確かな学力の定着を図る。</p> <p>【使用教材】生徒の興味関心や自らの課題に合った教材を自分で準備させる。</p>	<p>○家庭学習ノートの提出率</p> <p>○「学習習慣が身に付いた」「学力向上に役立っている」かどうかについて、自己評価させる。</p>	<p>○年間での全校での提出率80%以上</p> <p>○「学習習慣が身に付いた」「学力向上に役立っている」と肯定的に回答する生徒の割合が90%以上。</p>	現時点で各学年とも提出率は8割を超えている。3年生は受験が近づくにつれ減少するが前期の提出率は8割を超えている。	実施から5年目、全学年実施3年目となり、家庭学習の習慣は定着しつつあるが、学習内容について改善が必要であることと、小中連携での継続的な取組として発展させていくことが課題である。	○

	Gタイム	国・数・英	通年	<p>【指導体制】全校体制で年間を通して実施。実施教科は国数英の3教科、4週を1クールとして同じ教科に取り組む。前半の2週間は全員で同じ課題に取り組む、14日目に行う確認テストの達成度により、後半の2週間は一部の生徒を取りだして個別指導にあたる。</p> <p>【取り組みのねらい・目的】知識・理解、技能の習熟を図る学習や同一または類似の内容を必要に応じて繰り返す学習等を通して、基礎・基本の確実な定着を図る。</p> <p>【使用教材】国語科、数学科、英語科部員が教材および確認テストを作成して使用する。</p>	前半の2週間 のあとに行う 確認テストと 後半の2週間 の学習のあと に行う確認テ ストの平均点 を比較する。	各教科、各回に 実施する2回 の確認テスト で達成率が上 がる生徒が1 00%。	確認テストにおいて課題がある生徒に関しては、Gタイムにおいて抜き出し指導を行っている。定着の遅い生徒には昼休みの補充学習や放課後の補充において補完している。コンテストにおいては全員合格をさせる指導を積み重ねている。	授業における単元の学習と、Gタイムで学習していく内容をリンクさせ活用できるという実感を持たせていくことで生徒が授業をより意欲的なものにするのが課題である。コンテストは全員合格を目指し、補修を行っていることでの達成感味わわせることができています。	○
--	------	-------	----	---	--	---	---	--	---

	土テラ	任意の教科	月2回 年間20回	<p>【指導体制】NPO法人R O J E ボランティアプロジェクトに所属している大学生（主に東大）ボランティアが学習指導を担当。生徒への連絡や調整は教員が担当する。生徒は希望制で参加。今年度より、これまでの土曜午前の他に火曜日放課後、土曜授業の午後にも土テラを開設し、生徒がより参加しやすい環境を整え、個別指導を行う。</p> <p>【取り組みのねらい・目的】外部人材を活用した学習機会を設定し、生徒の習熟の程度に応じ、学習指導要領に示す基礎的・基本的な内容の確実な定着を行う補充的な学習と、学習指導要領に示す、内容の理解をより深める学習やさらに進んだ内容についての学習を行うなどの発展的な学習のできる機会を生徒に提供する。</p> <p>【使用教材】六月中学校で独自に作成したプリントや生徒が持参した過去問等を使用。</p>	定期的に、参加生徒に対して「学力の向上を感じられるかどうか」の自己評価をさせる。	年間を通じて、「学力の向上を感じられる」と肯定的に回答する生徒の割合が80%以上。	1年生に参加意欲の高い生徒がおり毎回20名程度が参加している。3年生は受験を意識しているため、意欲的に参加している。2年生の参加率向上を図りたい。	今年度も平日の放課後にも開催した、生徒の参加意識が高まり特に定期テスト前の参加率が向上した。任意の参加であることと、中位層の底上げを目的としているが、2年生の参加率の向上が課題である。平日の開催を放課後の補充学習へと発展させたい。	○
--	-----	-------	--------------	--	--	---	---	---	---

	各種学力調査の分析に基づく補習	5教科	通年	<p>【指導体制】区調査については全学年・全学級で実施。都及び国の調査については当該学年と実施教科の全教員で実施。習熟の程度の低い生徒の実態をいち早くつかみ、徹底した個別指導を行う。</p> <p>【取り組みのねらい・目的】基礎的・基本的な知識の着実な定着を図り、多くの生徒が主体的・対話的で深い学びにつなげられるようにする。</p> <p>【使用教材】各教科の教員が教材を作成して使用する。</p>	各学力調査の終了後すぐに分析を実施。	それぞれの調査で、正答率を前年より上げる。	<p>平成30年度 全体正答率（3科平均） 51.0%</p> <p>令和元年度 全体正答率（3科平均） 52.2%</p> <p>2月実施結果</p>	Gタイムを活用したコンテストや抜き出し指導を通して基礎・基本を中心とした補修を行っているが、読み取る力や応用力を高める指導方法の工夫が必要である。設問に対して無回答も課題であり、改善していく必要がある。	△
--	-----------------	-----	----	--	--------------------	-----------------------	--	---	---

	サマースクール	5教科	夏季休業日初日より7日間	<p>【指導体制】全学年が同じ期間に実施。学年ごとに日ごとの実施教科を定め、7日間で5教科をまんべんなく指導する。学年生徒を指導している5教科の担当教員と学年教員が協力して指導を行う。また、今年度より土テラをお願いしているNPO法人ROJEボランティアプロジェクトに所属している大学生（主に東大）ボランティアにも参加していただき、補習の充実を図る。</p> <p>【取り組みのねらいと目的】4月から7月までの学習内容の確実な定着を図り、9月以降の学習に見通しをもたせる。また、全教員が指導にかかわることによって、生徒一人一人の得意教科・分野や苦手教科・分野などに関する生徒理解を深め、9月からの生徒理解に生かす。</p> <p>【使用教材】各教科の教員が教材を作成して使用する。</p>	夏季休業終了後、確認テストの実施	夏季休業終了後の確認テストで全員の正答率を20%以上上げる。	学年が上がるほど意識が高く、9月以降の学習に見通しをもたせることができた。直後の確認テストでは、正答率%向上の成果がみられた。	直近では正答数や平均点の上昇がみられるものの、定着を図ることが難しい生徒もいる。新しい単元学習において継続的に学ばせるか、活用できるよう定着させるかが大きな課題である。	△
--	---------	-----	--------------	---	------------------	--------------------------------	---	--	---

中1 数学 特訓	数学	夏季休業日初日より7日間	<p>【指導体制】 中学1年生を対象に指名制で実施。学年を超えた全教員で個別指導にあたる。</p> <p>【取り組みのねらい・目的】 小学校の学習内容や中学校入学後の学習内容の確実な定着を図り、9月以降の学習に見通しと自信をもたせる。</p> <p>【使用教材】 教材は校内でオリジナルのものを作成・使用し、指導後に教材の見直しを図ることで、経年でより効果的な指導ができるようにする。</p>	中1 数学特訓終了後の確認テスト	確認テストで全員の正答率を20%以上上げる。	事後の確認テストでは全員の正答率が%に上昇している。	9月の効果検証では、全生徒の95%以上が正解している。その後、11月、2月の効果検証では正答率が低下していくことが分かった。1年を通して同じ問題で正答率の推移を見ているが、授業で新しい単元を学習していく中で、反復学習するだけでは定着が図れない困難さがある。	●
チャレンジ講座	数・英	10月～3月	<p>【指導体制】 外部の民間業者による放課後補習。対象生徒の選定および出欠管理は学年の教員を通信に關与。</p> <p>【取り組みのねらい・目的】 数学と英語において、習熟の程度の遅い生徒を対象に、基礎学力の定着を図る。</p> <p>【使用教材】 指定業者が作成した教材を使用。</p>	学年進行による正答率の減少を解消できたか。	区の学力調査における、正答率の前年比上昇。	今後実施予定 平成30年度 数学：48.5 英語：45.8	1・2年の全生徒の正答率であるため、チャレンジ講座に参加していない生徒も含まれるが、状況は看過できない状況である。	△

重点的な取組事項－2		不登校・不適応対応		
A	今年度の成果目標	達成基準	実施結果	コメント・課題
				達成度

不登校出現率の現状維持	不登校出現率 %台の維持	不登校出現率 %	不登校出現率は下げ止まりという感がある。悪い結果だとは考えていない。SSWとの連携は非常に円滑に行えた。	○	
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
不登校・不応適生徒を受け入れる学級の雰囲気作り	Hyper-QUにおける学級満足群70%以上	小中連携を通して、小1から中3までの身に付けるべき基本的な資質・能力を3校で精査し、共通実践を図る。全教員が失敗を恐れず楽しく学べる学級をつくる。	学級満足度 3年生 71% 2年生 38% 1年生 48% 学校全体 52.3%	各学年での差があり3年生が高まることは考えられるが、QUの結果を学年で共有し、学級や個人の課題にどのように対応していくか、そのスキルを高めていくことが課題である。	△
不応適生徒への対応の強化	不登校出現率の2%台維持	SC・SSWとの連携により必要な関係機関との連携を図りつつ、生徒の教室復帰を促す。学校運営協議会(CS)や開かれた学校づくり協議会とも連携し、民生児童委員と協力した保護者支援も充実させる。	不登校出現率 %	不登校出現率は2%前半で推移しており、安定しているものとする。SSWは非常に有効に活用できている。	○
全校体制での生徒への個別支援	修学支援委員会の年35回以上実施	毎週木曜3校時に修学支援委員会を実施し、不応適生徒の情報の共有化を図り、全校で支援していく体制を整える。また、特別支援教室開設に伴い、担当教員をメンバーに加え、個別支援の充実を図る。	毎週実施できた。(40回)	毎週木曜の3校時の定例会はすべて実施できた。SC、SSWとの連携も十分に図れている。重大な案件については、関係諸機関を交えたケース会議も行っている。	◎

重点的な取組事項－3		生徒指導の充実			
A 今年度の成果目標		達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
生徒の内面から学校生活を豊かにしようとする姿勢を育む		問題行動調査における問題行動発現率の減少	問題行動の発現率においては大きな変化はない。	生活指導主任を中心とした組織的な対応の精度を上げていくことが課題である。	○
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
いじめの早期発見・対応	Hyper-Q Uにおける侵害行為認知群10%以下 学級生活不満足群15%以下	道徳科・学級活動や生徒会活動を通していじめをしない・させない生徒の育成に努め、生徒の心を耕す指導の充実を図る。同時に、Q Uの分析を通して、いじめの早期発見、早期対応に努め、いじめが発生した場合には、「いじめ防止基本方針」に基づく「校内いじめ防止委員会」を中心に全校で組織的にその解決にあたる。	侵害行為認知群 3年生 6% 2年生 11% 1年生 8% 学校全体 8.3% 学級生活不満足群 3年生 13% 2年生 27% 1年生 20% 学校全体 20%	学校全体の侵害行為認知群については、概ね目標値であるが、学級内での生徒の居場所づくりをなお一層進めていく。 学級生活不満足群については発達段階が示す傾向もあるが、生徒の自己肯定感を高める指導をさらに推し進めていくことが課題である。	○
生徒の自尊感情を高める指導の徹底	Hyper-Q Uにおける非承認群20%以下	全教員の学級経営感覚を高め、学級指導力の向上を図る。生徒が学級に居場所を感じられ、なおかつ教員に素直に心を開ける環境を育むことで、全教育活動での意欲の高揚を目指す。そのため、教員には生徒を褒めて育てることを徹底し、失敗の寛容な環境を整備する。	非承認群 3年生 11% 2年生 23% 1年生 23% 学校全体 19%	非承認群については概ね目標値である。 しかし、自己有用感を感じられていない生徒が2割いる実態を真摯に受け止め、一人一人の生徒を認める指導をさらに充実させていく。	○

体罰の根絶	体罰発生件数0	全教員が厳しい指導と威圧的な指導を混同せず、生徒の内面に迫る指導を行う。服務についての研修も意図的・計画的に行い、苟も体罰を行わない気風を醸成する。	体罰発生件数0	服務事故研修を定期的 に実施していくことで教員の人権感覚を向上させ 不用意な言動で生徒を傷 つけることのないよう、 引き続き教員研修を実施 していく。	○

6 まとめ

(1) 今年度の成果と次年度に向けた課題及び解決の方向性

明るい学級と学習活動が年間を通して実施できた。学校行事や部活動での取組も充実し活躍の場を提供することができている。特別支援教室の開設により必要とする能力の育成にも取り組むことができた。

学力において目標まで課題を残す生徒の存在がある。必要とする補充をすすめているが今後も継続する必要がある。

○下記の資質能力を育成するため

①授業改善による学習課題解決能力の向上 ②生徒自治活動の活性化 ③学校行事の充実とボランティア活動の充実

【育成すべき資質・能力の3つの柱】

①何を理解しているか、何ができるか (生きて働く「知識・技能」の習得)

②理解していること・できることをどう使うか (未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力」の育成)

③どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか (学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養)

(2) 保護者や地域へのメッセージ

本校は創立33年となり令和の時代に必要とされる学びを提供していきたいと考えています。生徒たちの多くはエネルギーがあり活発で明るく行動的です。各教科学習においては課題を見つけ解決していく学習過程を通して、学習内容を身に付け将来の進路を選択し、社会性を身に付け、自己の能力や特性を発揮し、社会に貢献し自己の役割を主体的に果たせる生徒を育成していくことを目標としていきます。

そのために義務教育最後の3年間で各教科等の実践を通し、各学年とも常に授業改善を行いながら学習指導を進め、資質を磨き、能力を伸ばします。

(3) その他(学校教育活動全般について)

① 授業前の集中力を高める朝学習Gタイムの実施 ② あたかな人間関係づくりを行う「QU調査」を全クラス2回実施

③ 生活委員会による朝の「あいさつ運動」の実施と開かれた学校作り協議会との連携 ⑤ 区の学力調査結果の分析と学力定着テストの実施より授業改善の推進(PDCAサイクルの実践) ⑥ 各教科共通の足立スタンダードによる授業 ⑦ 生徒会によるいじめ根絶に向けた取組の実施

⑧ 小中連携による中学生ボランティアの派遣

以上のように取組を通して生徒の学力の向上と定着はもとより、地域や小学校とのあいさつ運動などを通して心の育成にも力を注いでいる。まだ課題もあるが今後も生徒が努力を重ね、あきらめず最後までやりぬく力を育成するために学校として具体的にできることを実践していく。